朝日新聞
THE ASAHI SHIMBUN DIGITAL

2013年01月11日

「東ベルリンから来た女」

映画「東ベルリンから来た女」から

■評：二面性強いる　政治の過酷

【山根貞男・映画評論家】小さな町の病院へ若い女医がやってくる。寡黙で、美貌（びぼう）に表情はなく、周りの人と打ち解けない。いや、むしろ逆に、誰もがなぜか彼女を疑惑の目で見ている。何か秘密があるらしい。実際、彼女はときおり自転車で森の奥へ行き、小さな包みを入手する。

ざっとこんな調子で始まるドイツ映画で、時代も場所も分からないが、サスペンスの強度とヒロインの美しさに引き込まれる。すると、事態が見えてくる。１９８０年夏、東ドイツのバルト海沿岸。東ベルリンから左遷された女医が、この町で西ベルリンの恋人と連絡を取り合い海外逃亡を図る。

主演はニーナ・ホス。冷徹な表情のもと、秘密警察の監視に女医が全身を強張（こわば）らせ、同僚の男性医師の優しさにもそっけなく、患者には一転、心を尽くす姿を好演する。ことに、矯正施設を脱出してきた少女や、転落事故で頭に致命傷を追った少年には、柔和な表情で応じる。森で恋人と密会するときの歓喜のさまも印象深い。

明らかにヒロインは二面性を強いられているのである。説明的な描写はゼロで、せりふは少なく、無駄なカットはない。まさにハードボイルドと呼ぶべき非情な画面のあり方で、それがヒロインに二面性を強いる政治の過酷さをサスペンス豊かに描き出す。

ハードボイルドとは、しかし、非情なだけではない。疑心暗鬼の人間関係の中、医師として患者と向き合うヒロインは、逃亡の日、意表をつく行動に出て、政治状況を突き抜ける。愛の力によって。素敵（すてき）なアクション映画を思わせるその展開が息をのませる。

監督はクリスティアン・ペッツォルト。これで昨年のベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞。日本には初登場の監督で、他の作品も見たくなる。

１９日から東京ほか公開、順次各地。